

平成二十六年二月十日発行  
皇學館論叢第四十七卷第一号  
抜刷

上泉信綱と千秋輝季の關係について（上）

伊  
藤  
信  
吉

皇學館論叢 第四十七卷第一号  
平成二十六年二月十日

## 上泉信綱と千秋輝季の関係について（上）

伊 藤 信 吉

### □ 要 旨

公家・山科言繼の日記『言繼卿記』には新陰流を創始した兵法家・上泉信綱の永禄末～元亀二年頃における京都での活動が記録され、その中に信綱と「千秋刑部少輔」の兵法演武の記述がある。筆者は別稿において、従来史料の根拠なく兵法師範と推定されていた千秋刑部少輔を室町幕府奉公衆・千秋輝季に比定し、輝季と信綱の親戚関係や信綱の四位叙位への輝季の関与を指摘する等、新たな人物像を提示した。

本稿ではこの信綱と輝季の関係をより詳細に検討すべく、まず先行研究を整理して上泉信綱研究で論じられてきた千秋輝季の人物像を訂正し、続いて両者の交流に影響を与えたであろう親戚関係をより詳細に検討した。最後に天覧試合の褒賞とも言われた信綱の四位叙位が、実は千秋輝季・中御門宣教の協力を得た信綱の奏請の結果であったことを指摘し、併せて天覧試合についても再検討を行った。

以上から信綱と輝季は親戚関係であると同時に師弟関係にあり、輝季は武将としての地位にある一方で、兵法演武・位階奏請など在京中の信綱を支えた高弟として位置づけられる。

□ キーワード

上泉武藏守信綱 千秋刑部少輔輝季 奉公衆 熱田大宮司一門

目次

一、はじめに

二、千秋輝季の人物像

・先行研究の整理

・千秋輝季の略歴

・信綱と輝季の年齢差

・先行研究の再検討

三、平野卜部氏を介しての上泉信綱と千秋輝季の親戚関係について

・親戚関係の再検討

・平野社預一件と信綱・輝季の動向 (以上、本号)

四、上泉信綱の四位叙位と千秋輝季 (以下、次号)

・先行研究の整理

・上泉信綱の位階奏請

・上泉信綱・千秋輝季・中御門宣教の関係について

・位階奏請の協力者

五、上泉信綱と千秋輝季の関係 (結びにかえて)

上泉信綱と千秋輝季の関係について(上)(伊藤)

## 一、はじめに

上泉信綱に関しては、研究論文・人名事典等の解説、史料や研究成果を引用しながらも執筆者の創作が混合する小説等様々な論述があるが、近年では中世古祥道氏『上泉武蔵守信綱傳私考』<sup>(1)</sup>、魚住孝至氏「上泉武蔵守信綱研究覚書」<sup>(2)</sup>において先行研究諸説の整理・再検討、史料批判を重視した信綱の研究が為されている。

魚住氏の研究整理を要約すると、信綱について簡潔な叙述がある『本朝武芸小伝』（一七一六年刊）『日本剣道史』（一九二五年）『剣道の発達』（一九二五年）『大日本剣道史』（一九三四年）、現在の通説の基盤となった信綱の伝記を含む『正伝新陰流』（一九五七年）、信綱に関して十頁内外で論述される『図説日本剣豪史』（一九七一年）『日本武道大系』（一九八二年）、『図説・古武道史』（一九六九年）、『増訂武芸流派大事典』（一九七八年）『剣豪史談』（一九八四年）、上泉家文書や郷土史的資料を用いた六百頁超の大冊の信綱伝ながら「この書は、資料を引用しながら、独自の解釈や推測を交えたところや、時に主人公になりきった形で書かれた記述も混じっている。年号も確定した詳しい年譜が載せられているが、個々の根拠が不明である。最近では、この本に依拠する小説も出されており、通説化しつつある」と魚住氏が留意する<sup>(3)</sup>『上毛剣術史 中 剣聖上泉信綱詳伝』（一九八四年）、以上の成果を再検討し信綱の基礎的な事柄を十四項目に分けて論じた『上泉武蔵守信綱傳私考』（一九九八年）が著された後、魚住氏が「先行研究では、史料の等級を十分に吟味することなく、また時代背景や判明した歴史的事実との照合もせずに論じられていた」<sup>(4)</sup>為、「改めて典拠となる史料の信憑性を考慮して、確かと言える点に絞って論じ」た「上泉武蔵守信綱研究覚書」を著した。この様に近年、先行研究の再検討と史料に基づいた信綱の研究が続く中、本稿でも主に中世古氏・魚住氏の研究成果に立

脚しながら、上泉信綱と千秋輝季の関係について論述を行いたい（尚、本稿は上下巻で二連の論文である為、文中の「本稿」「前述」「後述」等の用語もそれを前提としている。注については便宜上、上下巻それぞれで纏めた）。

## 二、千秋輝季の人物像

### 先行研究の整理

先ず先行の上泉信綱研究における千秋輝季の人物像を見ておく。先行研究において上泉信綱と千秋輝季の交流を示す史料は次に掲出する『言継卿記』の三例（史料①～③）のみが知られていた。<sup>(5)</sup>

- ① 梨門へ御暇乞に参、御盃被下之、御約束之小き錫杖被下之、次千秋刑部少輔、大胡武蔵守参、へいはう被御覽了  
(元龜元年八月十日条)
- ② 於真珠院齋有之、次持明院、左兵衛督、中院、薄、供澤路繼人佐雲松軒、千秋刑部少輔、大胡武蔵守、鈴木、等来、令同道葉室へ罷向、先小漬有之、次於御靈猿樂五番有之、各見物罷向  
(同年八月十八日条)
- ③ 次各令同道帰京了、於路次大秦真珠院へ立寄、酒有之、千秋、大胡、鈴木等兵法有之、各見物了  
(同年八月十九日条)

『言継卿記』における信綱の記事は永祿十二年（一五六九）一月十五日条（後述の史料④）を初出とし、以降三十回

上泉信綱と千秋輝季の関係について（上）（伊藤）

以上記録される。その中で信綱と輝季の交流が直接的に示される史料は①・③の二つのみであり、①の元亀元年（一五七〇）八月の上泉信綱（大胡武蔵守）<sup>⑥</sup>と千秋刑部少輔の兵法演武の記事が信綱と輝季の交流の初出記事である。「千秋刑部少輔、大胡武蔵守参へいはう」「千秋、大胡、鈴木等兵法有之」とある様に、例えば千秋・鈴木が上泉信綱の相手役を務める様な形で新陰流の演武を行ったものと考えられる。<sup>⑦</sup>よって上泉信綱の演武相手「千秋刑部少輔」は新陰流兵法を相当習得していたと理解できる。

諸田政治氏はこの「千秋刑部少輔」を「室町御所兵法師範」と推測している。諸田氏は、足利義輝御前試合において信綱の対戦相手が「兵法師範」の「千坂兵部」であったという上泉家口伝と、『言継卿記』に信綱と梨門・真珠院において演武を行った千秋刑部少輔（前述の史料①③）の記述から「即ち上泉口碑にある千坂兵部は、この千秋刑部の訛伝されたものであらうと筆者は考えている。彼は塚原卜伝が前に述べたように、京を去るに臨んで、將軍義輝に残したお稽古相手であり、後に兵法師範となった程の兵法者である。」<sup>⑧</sup>「塚原卜伝は、京を去るに臨んで、出藍の誉れ高い高弟、千秋刑部を義輝の御稽古相手として残して去った。これは信綱が京都に道場を開設する約十年前の天文年間末葉の事である」<sup>⑨</sup>と記す。

他にも「この千秋刑部なる人物は、兵法史上全く無視された無名の人物であるが、山科言継が常に信綱の上位に記しているところをみても、その当時の京都に於ける彼の兵法者としての位置が推定される。但しこれは地元による長年の言継との交誼と、室町御所兵法師範としての地位に対する敬意の表現」「足利義輝、千秋刑部及びその門人達が、揃って信綱に入門したのは、それから間もなくの事であった。」と義輝の御前試合で信綱に敗れた「千秋刑部」とその門人達が信綱に入門したとし、また信綱が天覧演武を行ったとして「元亀元年六月二十七日、この日兵法天覧の光栄に浴したのは、上泉信綱、千秋刑部少輔、鈴木意伯、丸目蔵人佐の四名である。上泉口碑によると、信綱のこの日

の装束は、絹布の白装であったという。」更に「信綱其の日の兵法演武の功績に対して、朝廷より即日昇叙の御沙汰が下った。これは前例のない事であった。従来の従五位の下から一階級昇叙されて、従四位下となったのだ。正親町天皇の直接御指示があり、それは異例の早さで実施されたものであった」とするが、口伝以外は直接的に根拠となる史料が記されていない。

この様に諸田氏の記す「千秋刑部少輔」は、塚原卜伝により足利義輝に推挙された兵法者が室町幕府兵法師範となった後、上泉信綱との御前試合を通じて信綱の門下となり、天覧演武の相手を務める程の高弟となった人物と纏めることができる。

しかしながら上泉家口伝に『言継卿記』の記事を引用して叙述するものの、口伝・史料を根拠とした叙述、根拠史料不明の叙述、創作と思わしき叙述が混然となっている様に見受けられる。以上の様に諸田氏は「兵法史上全く無視された無名の人物」であった「千秋刑部少輔」に注目した点は重要と言えるが、根拠史料を欠いた推測による千秋刑部少輔の人物像が提示されてしまい、結果それは一定の支持を得ている。<sup>(11)</sup>

その後過去の研究整理・再検討が試みられた『上泉武蔵守信綱傳私考』においては特に千秋輝季への論及は無く、続いて筆者が千秋晴季の研究において晴季の子輝季について若干の考察を試みたが、輝季の官途・没年といった基礎的事項の考察に止まっていて、上泉信綱との関係については論及しなかったこともあり、その成果が上泉信綱研究において引用された形跡は見当たらない。しかし続いて発表された魚住氏「上泉武蔵守信綱研究覚書」には次の様に論じられる。<sup>(12)</sup>

新陰流の演武は、この年八月に二度出る。言継が梨本宮門跡を訪れた折に「千秋刑部少輔・大胡武蔵守参りへい

ほう御覽ぜらるる」とあり、さらに大秦真珠院へ立ち寄った際に「千秋・大胡・鈴木等兵法これ有り、各見物し了ぬ」とある。千秋刑部は藤原輝季で、従五位上であった。こうした演武もしているのです、正親町天皇の御前での天覧演武はあった可能性が高い。

右の様に魚住氏は「千秋刑部は藤原輝季で、従五位上であった」と述べながらもその典拠史料を掲出していないが、『歴名土代』<sup>(14)</sup>の従五位上の項に「藤<sup>千秋</sup>輝季 元龜元・六・十八、同日刑口少輔」とあり更に「同四・三・、討死」とあるのでその指摘は正しい。上泉信綱研究において「千秋刑部少輔」は従五位上・藤原輝季に比定されるに至ったが、氏名・官位が判明するのみで、千秋家が累代の奉公衆家であったという基礎的事項も含め、具体的な人物像について踏み込んだ論述は為されなかった。

その後筆者が千秋輝季の基礎的研究を行い、上泉信綱と演武を行った「千秋刑部少輔」は「室町御所兵法師範」ではなく累代の室町幕府奉公衆・千秋家の当主・千秋刑部少輔輝季であることを指摘した。<sup>(15)</sup>しかしながら信綱と輝季の関係については基礎的事実の指摘に止まり、研究の余地を残した為、本稿を記すことにした。

### 千秋輝季の略歴

上泉信綱については前述の先行研究に詳しいが、千秋輝季については従前余り知られていなかったと思われるので、便宜上次に拙稿より<sup>(16)</sup>輝季の略歴を纏めておきたい。

熱田大宮司藤原氏の流れを汲む千秋家刑部少輔家の当主は、室町幕府奉公衆に任じられると共に度々熱田大宮司を輩出したが、戦国期には奉公衆家と大宮司家に家職によって分家した。その奉公衆家の千秋高季は平野社預・平野卜



部兼永の三男を養子に迎え、その養子・千秋晴季は足利義晴・義輝・義昭に仕えたが、織田信長による義昭の京都追放後も在京し、天正十一年頃からは同じ卜部一族の吉田兼見の扶助により吉田郷に留まり天正十三年に病没した。晴季には千秋輝季・小泉太郎左衛門尉の二子が確認できる。

千秋輝季は永禄元年（一五五八）に叙爵、永禄二年（一五五九）四年頃には足利義輝の奉公衆（二番衆）に、永禄六・七年頃には左近将監・義輝の申次に任じられた。上洛前の足利義昭近臣歴名に父・千秋月齋共々三番衆に名を連ねており、義輝死後は義昭に仕えたと考えられる。輝季は元亀元年六月（八月にかけて）上泉信綱と、元亀二年頃には明智光秀との交流が知られ、伊勢氏・諏訪氏など一部の幕府衆と同じく光秀の旗下にいたと推測される。元亀四年（一五七三）二月、足利義昭と織田信長の対立により、織田方の明智光秀が近江国今堅田城を攻略した際に輝季は光秀に従軍して討死した。

輝季の年齢については傍証を重ねた結果、永禄元年（一五五八）の叙爵時で十五歳前後（前後幅は大凡五歳以内）、元亀四年（一五七三）の討死の時点で大凡三十歳前後と考えられ、信綱と輝季の官位奏請・兵法演武があった元亀元年（一五七〇）には、輝季は大凡二十七歳前後と推測される。

### 信綱と輝季の年齢差

上泉信綱の生年・年齢については、信綱の嫡孫・泰綱が慶長五年（一六〇〇）に四十九歳で戦死したことから逆算すると、永禄四年（一五六二）の「関東幕注文」に記載される「上泉大炊助」が信綱の子・秀綱に比定できるので、既に信綱から家督を譲られていたであろう秀綱はこの時三十歳以上と考えられるから、信綱もまたこの時五十歳以上と考えられ、生年は永正五年前後が相応しいとし、柳生来訪が五十代半ば、言継との交流は六十歳前後となり、「そ

れぞれの叙述にも相応しい年齢と考えられる。」と推察されている。<sup>(17)</sup>

すると信綱と輝季が演武を行った元亀元年頃の上泉信綱の年齢は六十歳前後、千秋輝季の年齢は二十七歳前後（二十代半ば～三十代前半）と推測され、大凡三十歳程の年齢差があり、例えて言えば親子程の世代の差があったと考えられる。この年齢差は、両者の関係を考える上で、また両者の交流する姿を想像する上でも参考となるであろう。

### 先行研究の再検討

以上の論述を基に先行研究の再検討を行いたい。前述の如く先行研究において輝季の具体的な人物像を示した諸田氏の論説を再検討する。

先ず、輝季が室町御所兵法師範であったという説について再検討したい。輝季は家職によって足利義輝の奉公衆となった後に申次職に拔擢された人物で、義輝に仕えた頃の輝季の年齢は十～二十代であったと考えられる。よって諸田氏の説く様な塚原卜伝の推挙によって室町幕府に出仕して門人を抱えた兵法師範ではない。

次に信綱と輝季の足利義輝御前試合について再検討する。諸田氏は千坂兵部と上泉信綱が足利義輝の御前で試合を行ったという上泉家の口頭伝承を、「兵法師範」である「千坂兵部」が梨門・真珠院で信綱と演武を行った「千秋刑部」の訛伝であると推測し、千秋刑部が室町御所の兵法師範であったとする。その口伝の記述を次に記す。<sup>(19)</sup>

この時の試合については、上泉口碑に厳然と伝承されている。当代の上泉治氏は語る。

「どうも信綱は御前試合になるものを、何回もやっておるらしく、この時も將軍（義輝）の面前で、当時日本一といわれた兵法師範を始め、十余人を打負かしたという伝承になっているんですが……」

といわれるのである。そして、「ただ、その兵法師範の名前が、千坂兵部というんですから、こりやあどうも曖昧なものでして……」

成程それも無理はない。千坂兵部といえば場所は有名な敵役、吉良上野介と因縁深い山形県のみ沢であり、上泉家は歴としたみ沢藩士である。(略) み沢藩の名家老千坂兵部(略)を想起させるからである。(略)しかし、それではこの伝承は全くの虚構であろうかというのと、そうではない。言継卿記に(以下略)

として前述の様に『言継卿記』(前述の史料①②③に該当)の信綱と輝季(千秋刑部少輔)の演武・交流の記録を挙げて、「信綱の兵法演武のあるところ、常に鈴木意伯と千秋刑部少輔が、その行動を共にしている事」等から「即ち上泉口碑にある千坂兵部は、この千秋刑部の訛伝されたものであろう」と記す。<sup>(20)</sup>輝季が兵法師範あつたという説は史料が掲出されずその根拠が不明であるが、上泉家口伝では御前試合で信綱と戦った千坂兵部が兵法師範と伝わるので、千坂兵部は千秋刑部の訛伝と考えられるから、千秋刑部は兵法師範であつたという論法と見受けられる。

諸田氏はこの御前試合の開催時期を永禄七・八年(一五六五)とする。<sup>(21)</sup>そこで永禄期の千秋氏の官途を見ると、千秋晴季は永禄元年に剃髪しており、輝季は永禄元年に叙爵して暫く無官、永禄六・七年(一五六三・四)に左近将監を称し、元亀元年(一五七〇)に従五位上・刑部少輔に叙任されている。<sup>(23)</sup>すると永禄七・八年には正確には千秋刑部少輔を称する人物は存在せず、逆に輝季が刑部少輔となつた元亀元年には足利義輝は既に死没している。すると当時の口伝であれば、正確には御前試合は信綱と「千秋左近将監」<sup>(24)</sup>によるものとなる筈であり、この点に疑問が残る。輝季が左将監を経て刑部少輔に昇進したことに關する口伝の記述も、考証による論述もなされていないが、仮に輝季の最終官歴から「千秋刑部少輔」と口伝されたと考えた場合でも訛伝に關して尚、疑問が残る。そこで「千坂兵部」

と「千秋刑部」の訛伝について考えてみたい。

先に引用した口伝に関する論述を見ると、諸田氏は「千坂兵部」・「千秋刑部少輔」に読み仮名を付けていない。<sup>(25)</sup>「米沢藩の名家老千坂兵部」<sup>(26)</sup>とあるから口伝の千坂兵部は上杉氏家臣・千坂氏であり、通常「ちさか」と読むようである。<sup>(27)</sup>しかし訛伝されたという「千秋刑部少輔」の「千秋」は「ちあき」ではなく、『お湯殿の上の日記』<sup>(28)</sup>元龜元年六月十七日条に「ほうこうのせんしう」（奉公の千秋）と記載されることから信綱在世の元龜元年当時から「千秋」は音読して「せんしう」即ち「せんしゅう」と発音されていた。すると上泉信綱在世当時から率直な口伝であれば「せんしゅうさこんのしょうげん」「せんしゅうぎょうぶのしょう」がなぜ「ちさかひょうぶ」に訛伝されて上泉家に伝えられたのかという疑問が残る。これを解決し併せて口伝の性質を明らかにしなければ、この部分の口伝を根拠とし、その内容をそのまま史実と捉えることは難しい。よって御前試合そのものの史料が明示されない以上、足利義輝御前試合が上泉信綱と室町御所兵法師範・千秋刑部少輔（輝季）によって行われたという説には賛同し難い。<sup>(29)</sup>

続いて天覧演武についても再検討したい。従来から信綱の天覧演武の有無そのものが争点となっていた。前述のように諸田氏は「元龜元年六月二十七日、この日の兵法天覧の光栄に浴したのは、上泉信綱、千秋刑部少輔（略）」と述べるが上泉家口伝以外に根拠を欠いている。しかし前述の様に天覧演武・即日叙位のあったとされる元龜元年六月二十七日は、宮中女官の記録『お湯殿の上の日記』<sup>(30)</sup>元龜元年六月二十七日条に「ことなることなし」と記載されるのみであるから、禁裏では特別な出来事は無かったらしい。よってこの記事に反証する様な天覧演武そのものの史料を明示し得ない以上は、元龜元年六月二十七日の信綱と輝季の天覧演武についても、今のところ史実とは認め難い。

### 三、平野卜部氏を介しての上泉信綱と千秋輝季の親戚関係について

#### 親戚関係の再検討

上泉信綱と千秋輝季の関係については次頁・別表1の略系図から、平野家を介して千秋家・上泉家が親戚に当たることが理解できる。

但し上泉信綱が平野卜部氏と姻戚関係にあったことを証明する史料は『言継卿記』に僅か一例しかない。以前、拙稿においても信綱と平野氏の姻戚関係について述べたが、それは注記でもあったので改めて本稿で見直したい。

『言継卿記』は京都における信綱の動向を知る上での基礎史料であり、注(5)に記した様に『前橋市史』の信綱関連記事の抄録により知られていた。その言継と信綱の出会い契機となったのが、平野社預職に関する問題であった。次にその『言継卿記』永禄十二年一月十五日条を掲げる。<sup>(31)</sup>

④ 耆婆宮内大輔来、平野社預長松丸申状持来、同大胡武蔵守おむ添状有之、父卜兼興犯氣時之儀、社頭如無之間、可有改易之由申之、予披露之事頼入之由申之、領掌了

永禄十二年一月十五日、耆婆宮内大輔が平野社預・平野長松丸書状と大胡武蔵守添状を山科言継に持参した。書状の内容は、「犯氣」により社頭を荒廃させた平野兼興(長松丸の父)の改易を願うものであった。この史料で上泉信綱

上泉信綱と千秋輝季の関係について(上)(伊藤)

千秋

政範

男

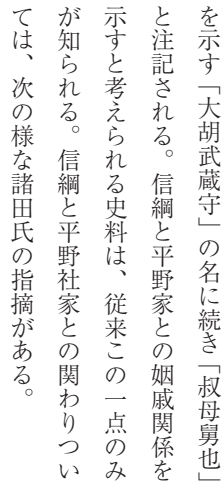
瑞芳  
男

高季  
||  
晴範

輝季

小泉太郎左衛門尉

男



—48—



されるので、平野長松丸の叔母の舅が上泉信綱であったことが理解できる。

但し諸田氏は「京都の名社平野神社の宮司吉田兼興の末妹」、「塚原ト伝も、塚原家に養子に入る前の実家は卜部姓であり、神人の出である。従って、吉田（卜部）兼興とト伝は、同族、同根、同職業であった。その故であろうが、塚原ト伝は上洛時には屢々この平野神社を訪れたという。信綱と、ト伝の関係とも睨み合せて、このような推定は立派に成立するのである。この二者と更に山科言継との関係を勘案すれば、この秀胤の結婚は充分に首肯出来るものと思われる」と述べる。<sup>(35)</sup>すると兼興の妹（長松丸の叔母）も卜部氏のように見受けられるが、近年拙稿で明らかにした様に、平野兼興は壬生官務家（小槻氏）の出身で子息の無かった平野兼隆の猶子となつて平野社預を継いだ人物であるので、従来の説には再検討を要する。

長松丸の「叔母」の候補は、①平野兼隆の息女で平野兼興の義妹（但し兼隆には子がいなかったという記録がある）、<sup>(37)</sup>②壬生官務家の息女で平野兼興の実妹（壬生家の息女を長松丸が叔母と称するかが論点）、③平野長松丸の母の妹（母方の叔母）の三例が考えられる。拙稿で明らかにした範囲では各種系図・史料には該当する女性の史料は管見には見当たらなかった。<sup>(38)</sup>長松丸の叔母に該当する人物は三候補があり且つ確定できない以上、従来説かれてきた様に長松丸叔母が平野卜部氏を出自とする兼興の妹と推定することはできないのである。

信綱と平野家との一族関係を再確認した上で、次に平野家と奉公衆千秋家の一族関係についても確認しておきたい。

千秋晴季・輝季父子は公私共に吉田・清原・細川・三淵氏等の一族との関係を基盤として活動しており、特に晩年の晴季は吉田家の庇護下にあった。しかしながら平野兼永の嫡男・平野兼隆の養子として平野家を後継した平野兼興と、兼永の実子である寿命院聖碩或いは千秋晴季は社務怠慢な兼興と平野社職に関して係争があり、また天正六年（八年）には平野兼興と千秋晴季（月齋）が地子銭を巡り訴訟に及んだことから、兼興と兼永の実子達とは時折対立が<sup>(39)</sup>



表面化している様に、その関係は良好ではなかったと考える。すると輝季は父同様に兼興とは不和であった可能性が高いと考えた場合、兼興を訴えた平野長松丸を擁護した信綱と、千秋晴季の子である輝季は共に兼興とは対立的な立場にあった点が共通していたと指摘できよう。

### 平野社預一件と信綱・輝季の動向

次に平野社職の問題へ介入した信綱の動向と、この問題への輝季の関与の有無を検討したい。『言繼卿記』<sup>(40)</sup>から信綱が介入した平野社預関係の記事を次に抄出する。

- ④ 耆婆宮内大輔来、平野社預長松丸申状持来、同大胡武藏守お、ご添状有之、父卜兼興犯氣時之儀、社頭如無之間、可有改易之由申之、予披露之事頼入之由申之、領掌了（『言繼卿記』永祿十二年一月十五日条）
- ⑤ 次大典侍殿御局へ参、平野社務之事申状、大胡武藏守状等御披露之事、頼入之由申了（同年一月十六日条）
- ⑥ 平野社長松申分御返事有之、兼興曲事之段非一事之条、可有御改易也、但又長松事、父髪そる之間、神職に如何之様思食之間、尚以御思案可被仰出之由有之、予申云、先例可有之間、吉田に可被相尋之由申入了（中略）耆婆宮内大輔召寄、平野長松事御返事之様申聞了（同年一月二十一日条）
- ⑦ 五辻、中御門、雲松軒被来、又平野預子長松丸、耆婆宮内大輔、大胡武藏守等同道来、錫持来、酒有之、次長松、耆婆、大胡等令同道、東山吉田へ罷向、同錫遣之云々、一盞有之、長松丸身上吉田を頼入之由予口入、一家頭之儀候間、聊以不可有疎意之由督卿返答、次各帰了（同年二月二日条）
- ⑧ 平野預兼興、少外記康雄等同来了（同年二月二十三日条）

上泉信綱と千秋輝季の關係について（上）（伊藤）

⑨ 耆婆宮内大輔来、大胡武藏守吉田へ可同道之由内々申之、大胡武藏守来、令同道吉田へ罷向之处、留守之由有之  
間自河原罷帰了(同年四月二十八日条)

⑩ 大胡武藏守来、令同道吉田へ罷向、紫蘇、独活、羌活等十両宛遣之、但他行云々、大隅甚九郎に申置罷帰了

(同年四月二十九日条)

⑪ 大胡武藏守来、令同道吉田へ罷向之处、自一昨日深草に逗留云云(同年五月七日条)

⑫ 大胡武藏守来談、次吉田右兵衛督暫来談了(同年五月十五日条)

以上の様に長松丸に協力した人物は、上泉信綱(大胡武藏守)(史料④⑦⑨⑫)、耆婆宮内大輔(史料④⑥⑦⑨)、山科言繼(史料④⑫)相談に応じたのは吉田兼右(史料⑦)であった。耆婆宮内大輔が信綱に言繼を紹介し、その言繼は宮中そして吉田兼右へ働きかけている。五辻・中御門・雲松軒(史料⑦)も言繼邸において信綱一行と会見していた様である。また「平野預兼興」も言繼を訪ねている(史料⑧)。

すると信綱と輝季は平野卜部氏を介して親戚関係にあったとは言え、平野社預訴訟に関して信綱と輝季の交流を示す史料はなく、その時の両者の関係は不明である。しかしながら山科・吉田・中御門各家は輝季・信綱共通の人脈に連なることから、兵法演武や官位奏請を共にする関係にあった信綱と輝季が、平野社預一件、進んで平野家を介しての親戚関係について全く知らなかったとは考えにくく、両者は両家の関係を認識していたものと推測する。

(以下、次号)

注

(1) 中世古祥道氏『上泉武蔵守信綱傳私考』（南勢町教育委員会 平成十年）

(2) 魚住孝至氏「上泉武蔵守信綱研究覚書」『武道・スポーツ科学研究所年報・第十七号』（平成二十三年度）

(3) 諸田政治氏著『上毛剣術史 中 剣聖上泉信綱詳伝』（煥平堂・昭和五十九年）は、信綱の伝記としては大著で貴重な参考書となる。しかし本書は、諸史料・諸資料に拠って考証された論述、史料の飛躍的解釈や根拠史料を明示されないままの論述、登場人物の台詞などの創作的な論述が混成されて、それら論述の境目・関係性も不明確である。以上から同書の内容を引用・批判することは、学術論文としては慎重にならざるを得ない。

しかし諸田氏は「本書をなすに当って、左の二点に特に注意した。一、単なる無味乾燥な史料の羅列に陥らない。信綱史料に関しては、良質と思われる古典の要点を殆んど抄録したつもりである。だがそれだけに偏すると、読者は激減するであろう。それでは本書の目的である正しい信綱像を浮彫りにし、広く世人に理解されたいとする意味をなさないからである。二、小説に堕さぬよう深甚の注意を払う。小説では、かえって剣神信綱の冒流になることを怖れたし、それに読者の水準を、かなりのハイクラスに定めたいと思ったからでもある。」「本書は歴史上良質なる史料と思われるもの、即ち新陰流伝書類、言継卿記、上泉家文書、原沢家文書、柳生家文書等をその主体として構成し、どう考えても不合理と思われる従来の通説のある部分は切り捨てたり、又各種古典の要点を慎重に総合検討し、かなりの自信をもって新説を立てておいた。これらの諸点に関しては、確実なる新史料を御提示の上での御反論を期待するし、又、後学の御叱正をお願いしたい。」と述べていること、中世古・魚住氏といった先行研究者が同書を引用・検討の対象としていること、魚住氏が留意する様な同書の「通説化」も考慮して、本稿でも同書を検討の対象とする。論説の再検討を通じて信綱と輝季の新たな一面を提示したい。

(4) 前掲注(2) 魚住氏論文

上泉信綱と千秋輝季の関係について(上) (伊藤)

(5) 前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第二巻』(前橋市 昭和四十八年)

(6) 信綱が『言継卿記』に「大胡武蔵守」或いは「上泉武蔵守」として記載されることは、前掲注(2) 魚住氏論文ほかにも指摘がある。

(7) 新陰流兵法は「集団での戦い方ではなく、最初から相手と一対一で向き合う形で考えており、敵である打太刀が打ち懸かるところを、転じて一拍子で勝つ」「個々の武士が大軍団の中に埋没する時代に、武士の独立した矜持を持って、自らの身と心のあり様を自覚しつつ、相手の太刀の下へ踏み込んで間合を勝つ。截合の実践武術から、二人で流派の形を稽古をする中で、身心を練ることへと大きく飛躍させた」(前掲注(2) 魚住氏論文)と魚住氏が述べることから、信綱・輝季・鈴木が各々独自の兵法を披露したのではなく、「一対一で向き合う形」例えば信綱を主とし打太刀を輝季や鈴木が務めるという様な演武を行ったと考える。

(8) 前掲注(3) 諸田氏著書三七二頁。

(9) 前掲注(3) 諸田氏著書三五八頁。

(10) 前掲注(3) 諸田氏著書三七二頁・三七五頁・三七九頁・三八三頁など。

(11) 中条横也氏『活人剣聖 上泉信綱』(叢文社 平成二十五年)には「千秋刑部(足利將軍家剣術指南)」「千秋刑部と言えば、確か塚原卜伝殿の高弟」とあり、千秋刑部は將軍家の剣術指南役であり卜伝の高弟として描かれている。

(12) 伊藤信吉『室町幕府奉公衆・熱田大宮司家一族、千秋晴季(月斎)について―千秋氏と平野・吉田両卜部氏との関係について―』『神道史研究 五十八巻二号 熱田神宮御創祀千九百年記念大会 特輯 熱田神宮の研究』(平成二十二年)所収。

(13) 前掲注(2) 魚住氏論文

(14) 湯川敏治氏編『歴名土代』(続群書類従完成会・平成八年)

(15) 伊藤信吉「室町幕府奉公衆・熱田大宮司家一族、千秋輝季について」『皇學館論叢』通卷二七二号（平成二十五年）

(16) 前掲注（12）（15）拙稿

(17) 前掲注（2）魚住氏論文

(18) 前掲注（15）拙稿で、義輝が輝季を申次職に抜擢した理由に、両者の兵法・剣術の同好が関連した可能性を指摘した。但し義輝に仕えた頃の輝季に関する兵法関連の史料は管見によると見当たらないので、あくまで可能性を指摘するに止まる。

(19) 前掲注（3）諸田氏著書 三七一～三七二頁。

(20) 前掲注（3）諸田氏著書三七一～三七二頁。

(21) 前掲注（3）諸田氏著書の本文では永禄七年六月に信綱と輝季の義輝御前試合があった様に描かれるが（三五六～三七五頁）、六一頁の年譜には「永禄八年（中略）御所兵法師範、千秋刑部と試合、義輝、刑部共に信綱に入門」とある。尚、足利義輝は永禄八年五月に弑逆される。

(22) 前掲注（12）拙稿

(23) 前掲注（15）拙稿

(24) 輝季の左近将監就任の確実な初見は永禄七年六月一日である。前掲注（15）拙稿

(25) 登場人物全てに読み仮名が記されているわけではないが、「愛州移香齋」「愛州惟脩」「宝蔵院胤栄」「北畠具教」など人物によって読み仮名が記される。前掲注（3）諸田氏著書二四～二五頁など。

(26) 前掲注（3）諸田氏著書 三七一頁。

(27) 「千坂景親（ちさかかげちか）（略）千坂氏は越後守護上杉氏の直臣として文明く明応にかけて対馬守実高が守護奉行人の地位にあった」（山本大氏・小和田哲男氏編『戦国大名家臣団事典 東国編』新人物往来社 昭和五十六年）、「ちさかかげちか

上泉信綱と千秋輝季の関係について（上）（伊藤）

千坂景親（略）千坂氏は越後守護上杉氏の直臣」（阿部猛氏・西村圭子氏編『戦国人名事典』新人物往来社・昭和六十二年）、  
「チサカ タカマサ 千坂高雅 実業家、羽前米沢藩の国老千坂高明の養子」（大日本人名辞書刊行会編『大日本人名辞書  
第三卷』講談社・昭和十二年増訂）など。

（28） 塙保己一（原）・太田藤四郎（補）編『続群書類従 補遺三 お湯殿の上の日記（七）』（昭和三十三年）

（29） 前掲注（1）中世古氏著書に「『図説・古武道史』が、『俗説にいうような天覧に入った事実はないと見えて書いていない』  
という説に賛同」（六〇頁）という見解に対し、前掲注（2）魚住氏論文では梨本宮門跡での信綱と輝季の兵法演武から「千  
秋刑部は藤原輝季で、従五位上であつた。こうした演武もしているので、正親町天皇の御前での天覧演武はあつた可能性が  
高い」とする。しかし上泉信綱研究において、未だに天覧演武の史料は明示されていない。尚、中世古氏は著書の中で「天覧」  
の語を用いるが、「日本で剣術を最初の天覧に供した」の引用記載の後にも「この天覧の年時」「天覧の時」「天覧のことはい  
わない」等と続くので、同書の「天覧」も「天覧演武」といった意味で解釈した。

（30） 前掲注（28）『お湯殿の上の日記』

（31） 国書刊行会編『言継卿記 第四』（続群書類従完成会・平成十年）

（32） 前掲注（3）諸田氏著書 三九二～三九三頁

（33） 前掲注（3）諸田氏著書 五九頁

（34） 前掲注（3）諸田氏著書 四四九頁

（35） 前掲注（3）諸田氏著書 三九三～三九四頁、四四九頁

（36） 前掲注（12）拙稿

（37） 「平野社再興縁起」（上田正昭監修『平野神社史』平野神社社務所 平成五年）に「兼隆子孫なく」とある。ほか平野社家周

辺の人間関係については、注(12)(15)拙稿参照。

(38) 前掲注(12)(15)拙稿

(39) 前掲注(12)拙稿

(40) 前掲注(31)『言継卿記』

上泉信綱と千秋輝季の関係について(上)(伊藤)